留学前後の日本語学習者の日本観・日本語観
―複文化複言語使用者として―

岩　﨑　典　子*

1. はじめに

近年、文化本質主義（ある文化を純粋で不変的なものと捉える）を問題視し、文化を流動的で動能的なものとして捉える必要性が叫ばれ（例えば久保田，2008）、文化・言語の教育を「なんらかの形で一般化し固定した形で学習者に一律に与えるものから、学習者自身に自分の観点からそれぞれのことばと文化を発見させ、そこで自分なりの学習の手がかりを捉えさせる手助けをするものへ」(細川，2002:69）転換することが提唱されている。

一般に「文化」と呼ばれているのは、自らと他者に関する認識に基づいて社会的に、または言説的に形成された複合概念である（Kramsch, 1993；久保田，2008）。日本が外から見られる時、「それぞれの国が、長期にわたる日本との関係において、日本について異なったイメージを持って」いる（楠根，1998：102）と同時に、個々人が各国での言説に加え、自らの経験や関心事との関わりから、多様な日本観（文化観、言語観）を構築している。

従って、日本語の非母語使用者が日本・日本人・日本語をどのように捉えているのかを知ることが「日本文化」の理解と日本語教育の進展、さらに、多様な文化を背景とする日本語使用者との共生のためにも不可欠であろう。

留学生や日本語専攻の学生の日本観に関する調査・研究は少なくないが、留学生数の多い東アジアの学生に関する調査・研究報告（岩井他，2008；呉，2008；中川他，2006；守谷他，2011；孫，2004；見城，2007）がほとんどのようである。東アジア内での共生のためにこれらの国々からの留学生の視点が重要なことは否めないが、多様な視点からの「日本」を知るためには、その他の視点ついて知ることも重要であろう。

本稿では、ロンドン大学 SOAS の日本語専攻の学生の留学前と留学後の日本観・日本語観についての探索的調査を報告する。日本語の「学習者」を、文化や言語を学ぶ受け身的な主体として捉えず、母語文化でもなく目標文化でもない自分の第３の場（Kramsch, 2009）を構築し、社会的に行動する複文化複言語使用者（Zarate, 2003）と捉え、彼らの日本・日本語観から、日本文化のあり方を探ると同時に、彼らの複言語複文化能力をみる[1,2]。

2. なぜ「複文化複言語使用者」なのか

外国語教育、ことに、異文化能力の育成や多文化共生をも目標とする外国語教育のためには、「学習者」は「母語話者」からすべてを学ぶという不対等な構図は不適切である（例えば、Zarate 2003, p.92-93；Kern & Liddicoat, 2011）。外国語学習者は、母語話者とは違った視点から言語や文化を捉え、異なる方策で言語を使用することもできる、複文化複言語能力を備えた社会的行為者（social actor/agent）である。複言語複文化能力は Coste, Moore, & Zarate（1997）により以下のように定義されている（姫田訳 2011，p.252）：

＊ロンドン大学 SOAS 准教授

複言語複文化能力とは、程度に関わらず複数言語を知り、程度に関わらず複文化の経験を持ち、その言語文化資本の全体を運用する行為者が、言語でコミュニケーションし文化的に対応する能力を言う。重要なのは、別々の能力の組み合わせではなく、複数に入り組んだ不均質な寄せ集めの目録としての複合能力ということである。単体の能力や、部分的能力も含まれる。

この能力を伸ばすことにより、言語意識やメタ言語ストラテジーが生じ、社会的行為者としてタスクを遂行する自発的な方策を意識したり管理したりできる（Coste et al. 2009, p.11-12）。また、ある言語の特徴についての観察力や、他者との関係を築いたり新しい不慣れな状況に対応したりする能力も高まる。これらの能力は、複数の外国語を知っていると一層育成されやすいという。また、もともと複文化を備えていると、自分の文化を単一的に捉えないため、自国に対する日本という二項対立的な見方からも解放されやすいだろう。

本稿では、まず、複言語複文化能力が育成されやすいと考えられる、日本語以外にも複数の文化や言語経験のある日本語専攻の学生が留学前と留学後にどのような日本・日本語観を持っているのかを探り、次に、複文化複言語使用者の能力として重視される、自らの文化・言語資源を生かしたコミュニケーションに関わる選択やストラテジーの一端を明らかにし、学習者を複文化複言語使用者として捉える日本語教育への示唆を考察したい。

3. 方法

対象となったのは、表1の日本語専攻の学生8人である。SOASの日本語専攻の学生中、英国籍ではない学生の割合は、2007年から2011年の間、31.1～38.3％を占める。それを反映し、8人の文化・言語背景も多様である。日本への渡航経験がなかったのは2名（リズとサラ）だけで、ほかは留学前も日本への渡航経験があった。

日本語専攻のカリキュラムの3年目は協定校に留学することが必修となっており、2011年秋に留学するすべての学生に参加を呼びかけた結果、この8人が同意した。留学先は、関西地域（ケビンとサラ）、名古屋（アンナ）、他は関東地域であった。留学前の2011年5月―6月と留学後の2012年10月に、準備した質問事項を中心に英語または日本語で約1時間の半構造インタビューを行った[3]。本稿に関連するのは以下の3項目で

表1　参加した学生

仮名	性別	年齢	国籍	日本語以外の言語	継承など
サム	男	20/21	英国	英語（フランス語，ポルトガル語，ラテン語，古典ギリシャ語）	母親はアメリカ人
ケビン	男	25/26	英国	英語（フランス語）	
ヤン	男	19/21	オランダ	オランダ語（ドイツ語，フランス語，スペイン語）	
ホセ	男	23/24	スペイン	スペイン語，カタルーニャ語（フランス語，韓国語）	カタルーニャ人
リズ	女	20/21	英国	英語（スペイン語，フランス語，韓国語）	母親はアイルランド系，父親はセントクリストファー島系
サラ	女	20/22	英国	英語（フランス語，中国語，古語）	
アンナ	女	24/25	ポーランド	ポーランド語（韓国語，ロシア語）	
ベル	女	20/21	フランス	フランス語（スペイン語，イタリア語）	母親は日本人

注1：年齢欄には、2回のインタビュー時の両方の年齢を記した。
注2：（　）内の言語は学校教育や自習で学習した言語。

ある。

(1) 留学はどうだったか (留学後)

(2) 日本、日本人、日本語と聞いて思い浮かぶことば３語ずつとその理由 (留学前後)

(3) 日本人のコミュニケーション・スタイル (前)

日本観・日本語観については、主に (2) の回答とその説明に焦点を当て、言語・文化資源を生かした方策については (1 － 3) の回答や説明として挙げられた日本人らしい言語行動を自分も同じように遂行するのかどうかという問いの答えとして得られた発言を主に取り上げた。

4. 日本観・日本語観

留学後、留学経験のすべての側面が肯定的ではなかったとは認めながらも、留学前と同様、またはそれ以上に、日本や日本語に高い関心や熱意を抱いていた。表２に各自が挙げた順に (2) の回答を列挙した。日本についての回答は実は日本人についてのことも多く、国としての日本はどうかと

表２　日本、日本人、日本語と聞いて思い浮かぶ言葉

仮名		留学前	留学後
サム	日本	sushi, sunset, friends	夏、居酒屋、友達
	日本人	smiling, bowing, friendliness	笑顔、曖昧、礼儀
	日本語	kanji, keigo, (its) sound	曖昧、漢字、ひらがな
ケビン	日本	culture (art and kanji), food (居酒屋), kindness	crowded/busy, traditional, unique (night life, food, people)
	日本人	kindness, traditional (they stick to customs), fun	humble, modest, diligent, generous, caring, and senpai-kohai relationship
	日本語	pretty (melodic), complicated, polite	challenging, varied (many forms, dialects), and hesitant
ヤン	日本	concrete, ugly, mountains	clean, kind of unorganized (Just very ごちゃごちゃ, ボロボロ)
	日本人	peace, clean, polite (in customer things, how to approach)	hospitable (friendly and helpful). predictable
	日本語	(very different, indirect)	inventive (e.g. リア充), きれいな日本語、敬語
ホセ	日本	cleanliness, sashimi, sense of community	閉鎖的 , different, Fuji, 就活
	日本人	polite, delicate (maybe for women in particular), and then polite again, organized	polite, childish (particularly with girls) reserved
	日本語	kanji, agglutinative, difficult	省略 (in reading), 漢字, difficult
リズ	日本	lively, traditional, vibrant	big, fun, strong
	日本人	polite, quiet, serious	very conscientious, extra, guarded
	日本語	orderly, nice to listen to, bowing	necessary ("It's my life"), beautiful, fun
サラ	日本	Tokyo, Tokugawa, fish	安全
	日本人	reserved, kind, quiet	丁寧 , 近寄り難い , 暖かい
	日本語	lyrical, smooth, beautiful, difficult	スムーズ、きれい、丁寧
アンナ	日本	sushi, kimono, and concerts	温泉, concerts, mountains
	日本人	manners, their appearance (black hair, brown eyes), bowing	rules, enjoying food, fashion
	日本語	syllables, particles, 自動詞他動詞	漢字、敬語、電子辞書
ベル	日本	very organized, take work seriously ; they work a lot, too much	isolated island, closed
	日本人	respect (for people); welcoming; kindness, politeness	自分のことの前に他のまわりの人のことを考える , disciplines, serious, modest, 規則を守る、おとなしい、遠慮する性格が目立つ
	日本語	soft language; nice to hear; obviously unique; appealing, keigo	魅力的、ユニーク、尊敬

聞き直す場合も何度かあった。3語ずつの回答を求めたが実際には2語しか思い浮かばなかったり、もっと挙げられたりすることもあった。

日本と聞いて連想する言葉は、個々人の興味や経験に直接関わる言葉（自分の国ではあまり見られない山、趣味で頻繁に行ったコンサートなど）が挙げられることが多く、回答は様々だった。留学後に複数の参加者によって挙げられたイメージとして、「閉鎖的」（ホセ）、"isolated island/closed"（ベル）がある。

日本人については、留学前は丁寧さや礼儀、親切さや友好に関わる言葉が多く、留学後も引き続き、多く挙げられた。しかし、留学後は、遠慮や慎重さに関わるもの（reserved, guarded）や真面目さ（diligent, very conscientious, disciplines, serious）に関わるものが増えたほか、規則（rule）の言及が増えた。日本語に関しては留学前後で類似しており、どちらも漢字、敬語（丁寧、尊敬）のほか、見た目や聞いて感じる美しさや学習の難しさが挙げられているが、敬語についての考え方は少し変わっていた。以下、留学後の学生の説明の中で浮き彫りとなった日本観や日本語観として「閉鎖性」と「丁寧さ」「敬語」について、学生の発言の例を挙げながら考察する。

4.1 閉鎖的な日本

「閉鎖的」または"closed（country）"という言葉を使ったのは3名であった。その理由として挙げられた日本人の持つ「外国人」像や外国人への対応については、すべての学生が触れていた。

まず、ホセは、自分がじろじろ見られ、地下鉄などで自分の隣の席に誰も座ろうとしないことに閉口し、日本が閉鎖的で均質的なために外国人が目立ち、その結果、悪意のない人種差別が生まれるのではないかと言う。また、ベルは、（短い海外旅行以外は）海外に出ようとしない、または出るのを恐れているような若者が多いという印象から"closed"ということばを挙げた。地理的にも孤立していること、国内での生活に満足しているということを理由として挙げていた。

ヤンは、日本で自分が外国人だからという理由だけで話かけてくる日本人がいたこと、留学生交流会のイベントでは外国人としての自分が利用されている（"being used as like some kind of object for them to show"）ように思えて戸惑ったという経験について、その理由は日本が"such a closed country"なためではないかという。ベル同様、日本には何でも揃っていて日本語だけ話していればよく、外部との接触がないために外国人をそのように扱うのだろうと考えていた。また、アンナは自分の学生寮で生活空間を共にした日本人学生数人について、恐らく自分が初めて接触する外国人であったためか自分のことを恐れ（they were just scared）て、話そうとしなかったという。

自分が外国人であるという理由で近づいてくる日本人については、リズも抜粋(1)のように、自分が一人の人間として見られていないと感じたと漏らしている。ヤンも抜粋(2)のように「外国人」に友好的な日本人に感謝しつつも、「外国人」として別扱いされ、対等の一個人として見られていないことがあるという不満を持っていた。

抜粋(1) リズ：It's back to the whole like not seeing someone as a full person? Like, I'd just be *gaijin* then, and I think they'd refused to see all the other things about me.

抜粋(2) ヤン：… many people showed a genuine interest, and people were always so nice.（中略）But sometimes there are those moments when you think like yeah, "am I just being, you know, that foreigner?" or "am I just being Jan", that's what I sometimes wonder.

さらにリズは、抜粋(3)のように外国人との接触を求める日本人には、恐らくはアメリカ人のステレオタイプから連想した外国人像があり、それに沿う外国人との接触を望んでいたと感じていた。

抜粋(3) リズ：The only things people really talk

to you about are being foreign, and they will comment on like how "oh you are not like how I expected, I thought foreign people are like this and like this".

また、「外国人は日本語が（上手く）話せない」という外国人像のために、「普通と違ったもっともっと簡単な言葉を使ったりするとか英語を使ったりする」日本人にベルは閉口し、日本語学習に力を注いでいるサラには、抜粋 (4) のように、腹立たしく感じられることがあった。

抜粋 (4) サラ：日本人じゃないですから日本語は絶対しゃべれないでしょうとか思い込まれて、（中略）日本語でしゃべったら、「あ、日本語が上手ですね」と答えたら、私はほんと、ハア（ため息）私は「ありがとうございます」としか言わなかったのに、どうして「日本語が上手ですね」って言うんだよ、とか思いました。（中略）それはまベーシックな日本語ですから。私は上手とは言わないんですけど、そんなに下手ではないですから・・・それは、2 年間 3 年間日本語を勉強してきたのに、その人はなんか、１年生の時第１週間で習うことばで、「日本語が上手ですね」と言ったら、私の 2 年間の勉強が、ムダにした気がします。

しかし、このような日本人がいることを認識しながらも、それを超えて友人関係を築けることを抜粋 (5) のようにサムが唱える。

抜粋 (5) サム：最初に誰かにあって、実は、まあ少しはひどいかもしれませんが、まあ仲良くしたいのはたぶん外国人か英語が話せるからだろうと思うこともあるけども、それを超えて、長く付き合ったら、遊んだりしたら、やっぱり本当にその仲の良い友達になったら、メンバーになれるような気がして、やっぱり、その状態の方が全然幸せになれそうな気がします。

4.2 丁寧な日本人，はっきり言わない日本人

日本人についても日本語についても「丁寧」というイメージがあるが、ホセの抜粋 (6) やベルの (7) のように、丁寧さには曖昧さや本音をはっきり言わない日本人のイメージが伴う。

抜粋 (6) ホセ：They are very, they use 敬語 and they are humble and all that. So, this, you see, is non-stop all day. They bow to each other for the smallest things, and it's a permanent thing you notice. And reserved, yeah, they, I mean they have this um, 本音 and 建前 thing, right? So they will sometimes not tell you what they really feel. (…) Sometimes, you really don't know what they mean.

抜粋 (7) ベル：日本人が結構遠慮する性格が本当に目立ちましたから、日本に行った時に、例えば、強い意見があるかもしれないけど、いつもはっきり言わないとか、いつも相手のことを考えるから、そういう時が何回もあって、そういうことを感じました。私はやり過ぎだと思いました。やはり言いたい事ははっきり言ったほうがいいと思います。

しかし、間接的で曖昧な表現を使うことの利点と問題の双方を客観的に捉え、日本人という集団の性向として捉えず、個人的なものと捉えていることが、サムの抜粋 (8) やリズの抜粋 (9) から伺える。

抜粋 (8) サム：（はっきり言わないことは）それは、やはり今になって、悪いところでもあるし、いいところでもあると思います。なぜかというと、ときどき絶対に相手に傷つけないように、本当のことを言わない方がいいと思います。（中略）で、絶対に自分の考えていることしか言わない日本人もいるし、（中略）ま、別に絶対に悪いことだとか絶対にいいことだとは言えないんですが、んー、その使うべきところ、ちゃんと使ってもらいたいなっていうふうに思っていますけど。

抜粋 (9) リズ：I have some friends that are very open but that's just because that what they are like. But in general, most of friends seem to be a lot more careful with others.

4.3 敬語観：規則に縛られる日本人

敬意を表すための表現として学習した敬語については、留学経験を通して別の印象を持つようになった学生も多い。距離感を感じるということの他にも、敬語を使うことになっているという規則に従い使っているという印象を与える銀行員や大学事務員には戸惑ったという発言が、サラやアンナの発言（"They just followed the rule blindly that they have to use *keigo*"）に見られた。

5. 複文化複言語使用者としての選択

複文化複言語使用者は、ある外国語を学習する時、母語話者を模倣するのではなく、自分の持つ様々な文化言語資源を活かして、コミュニケーションの選択をし、メタ言語ストラテジーを用いる。

例えば、本音と建前があり必ずしも本音を言わないという日本式のコミュニケーションについては、ある程度は日本人のような言い回しを使っても、抜粋 (10) や (11) のように、日本人のようには話さないという選択をしている。

抜粋 (10) ホセ：Of course, (*tatemae* thing is)not marked in me, but for instance, if they ask me "do you like something" and I don't, I will not say "好きじゃない". I would say "それはちょっと". So in this sense, I will do like the Japanese people. <u>But it's not anything more than this.</u>

抜粋 (11) ベル：あの時々言いたいことは言いますけど、言い方もありますよね、日本語で。（中略）結局、日本人のように<u>そうやってしゃべりたくないです。あのはっきり言わないこと。</u>

さらに、前述の抜粋 (8) のサムの日本人は自分の考えを伝えるべきだという彼自身の意見の表現をみると、サムがいかに日本語で自分の意見を表現しているかが興味深い。意見表明の前に「いいところでもある」や「絶対に」は言い切れないという注釈をした上でのモダリティー表現を駆使した「〜てもらいたいなっていうふうに思っていますけど」という発話にサムの慎重な選択が伺える。

敬語については、距離感があることに違和感を持つ英語話者も多いことが先行研究でも報告されている（例えば Iwasaki, 2011）が、リズの場合、抜粋 (12) のように、アルバイト先で同い年の先輩と険悪な関係であったが、敬語を慎重に使いつつその距離感を楽しんでいたようである。

抜粋 (12) リズ：I had to be really careful about my 敬語 every time because I was like if I do something wrong, she is gonna kill me. And also <u>I kind of enjoyed the distance</u> that 敬語 kind of gives to you. I always tried to be like <u>super polite</u> to her 'cause also she is *senpai* as well.

一方日本での敬語の使われ方に戸惑ったアンナは、自分は敬語を使いこなせるようになりたいが、相手のニーズに合わせて柔軟に使うのだという。

6. 考察と日本語教育への示唆

日本が均質である、日本人・日本語が曖昧であるなどという本調査の学生の日本観は、留学前の日本語教科書やメディアなどによる言説にも大きく影響を受けていることは間違いない。しかし、日本人の本音がわからないという見方は呉（2008）が報告している韓国人学生の日本人イメージとも類似している。呉は、日本語非学習者がマスメディアの影響で「ずるい」「残忍」などのイメージを持つのに対し、日本人との接触の多い日本語学習者がこの「二面的、本心がわからない」というイメージを持ちやすいと報告している。言語や文化の背景を問わず、多くの留学生が感じるようだ。ただ、リズやサムの発言にあったように、本調査の参加者は、日本人という集団の気質とは捉えてはいなかった。接触の豊富さが、客観的な判断へと導いたようだ。中川他（2006）も、日本語主専攻、非専攻を対象にした調査で、接触経験者に日本文化の客観的な視点が見られたと報告している。

本調査の参加者は、このような「二面性」に違和感を感じながら、ある程度の間接表現を使う一方、必ずしも自分の観察した日本人の言語行動パターンを模倣しないという選択をしているようだ。

閉鎖性に関しては、孫（2004）が、中国の留学生の帰国後の否定的イメージとして「日本社会の閉鎖性」と、それと同時に「欧米を崇拝し、アジアを見下す」ことを挙げている。同様に守谷他（2011）も台湾からの留学生が来日後に「日本人は冷たい」「差別的である」と感じたと報告している。本調査の参加者は見下されているとは感じなくとも、避けられたり、一個人ではなくガイジン（の見本）として接近されたと感じたりして差別を感じたようだ。このような経験は、Siegal（1995）やIino（2006）などの西欧圏からの留学生を対象としたエスノグラフィー研究でも明らかにされている。サムのようにそれを越えて同等のメンバーになる努力をすることを学生に促すのもいいが、留学生のためにも、留学生と接触する日本人のためにも最も望ましいのは、森山（2011）が「グローバル時代に求められる外国語教育の目標」として挙げる「『交わり』の日常化」や「協働作業」の機会を持つことのようだ。単なる交流のためだけの一時的接触は、外国人の見本化を助長しかねない。実際ヤンは留学生交流会の活動とは裏腹に、大学で同じ授業を通して日本人学生と共に学ぶ時こそ対等な人間関係を築けたことに触れていた。

ことばの教育に関しては、まずは、日本語教科書で概して丁寧な望ましい表現として紹介される曖昧な表現や、敬意を表す表現として導入される敬語の使用実態や機能の多面性をクリティカルに分析する力を養うことが必要だろう。

母語話者の単一の規範があるがごとく「規範」を指導したり、母語話者を模倣することを目指したりするのではなく、一般的な母語話者の言語行動パターンとされるパターンを提示する一方、言語使用の実態の観察能力を養うことが求められる。そして母語話者間の多様性の理解を高めた上で、主体的に言語使用の選択することを促し、賢明な選択やメタ言語ストラテジーの使用の手助けをすることを優先する必要があるだろう。

尾辻（2011）は、オーストラリアで日本または日本人を相手とする業務に関わる「日本語」「英語」能力を持ち合わせた会社員の自然発話とインタビュー・アンケートを分析し、わざと日本語に英語を混ぜたり、年の上下と関係なく「よほどの理由がない限り敬語をあえて使わない」など、複言語使用者が自分なりの言語使用をしていることを報告し[4]、「将来の日本語教育に向けて必要な能力」を論じている。尾辻は、学習目的を「本質的、固定的、多義的、流動的な言語や文化理解が交錯する中で自己の立場や言葉やアイデンティティを模索できる能力を学ぶ過程」としてもいいのではないかと提案している。

7.　おわりに

この調査の参加者は、留学前から日本人との接触が多かった。そのためもあってか「日本」と聞いてまず思い浮かぶことは「日本人」に関することだった。岩井他（2008）、見城（2007）、守谷他（2011）が調査した韓国、中国、台湾の学生とは違い、自国の歴史教育や歴史認識が日本のイメージに左右する可能性が低く、留学前から日本への渡航や接触経験からイメージを形成していたことが多かったため、留学後も日本・日本人・日本語観が大きく変容したわけではなかった。しかし、それでも新たな発見があったり、前にも抱いていたイメージの根強さを再発見したりしていた。

留学前の日本（人）観は大部分が肯定的なイメージ（polite, organized, lively, kind, clean, peaceful, safe）であった。留学後も同様の肯定的イメージを挙げる一方、丁寧さは間接的であいまいな言動と関係し、秩序は規則に縛られて順応性のない銀行などでの敬語使用と関連づけられ、不愉快な経

験と表裏一体であるという認識があった。また、留学後には、閉鎖性や外国人を特別視する傾向（外国人への恐れ、差別、行き過ぎたお世辞、あたかもモノとして扱われる外国人）などの側面を挙げていた。しかし、集団としての「日本人」を批判せず、個人レベルの問題と捉えるか、自分なりの解釈を見いだして解決していることが多かった。さらに、自分らしさを失うことなく日本社会にと参加しようとする積極性も伺えるなど、第３の場にある社会的行動者としての複文化複言語使用者の様々な選択が見られた。これからの日本語指導では、言語使用やメタ言語ストラテジーの主体的な選択と積極的な社会参加への手助けをすることが望まれる。

註

1 本稿は、フランス国立東洋言語文化研究所 (INALCO) 所属の研究機関である PLIDAM の鈴木恵里氏との共同研究のために収集したデータの一部に基づいている。

2 調査には、明治神宮国際神道文化研究所からロンドン大学 SOAS の日本研究センターへの支援による研究助成金 (small grant) をいただいた。

3 英語でも日本語でも、混ぜても構わないことにした。留学前は英語の使用がほとんどであったが、留学後は、８名のうち３名が主に日本語を使用した。

4 尾辻は Otsuji & Pennycook (2010) の「複言語使用者」ということばの「複 'pluri-'」という接頭語が分別性を前提していおり、実際の言語使用状態を表現するには言語イデオロギー的に問題があるという指摘に則り、「メトロリンガル」という表現を用いている。

参考文献

Coste, D., Moore, D., & Zarate, G. (1997) *Compétence plurilingue et pluriculturelle*. Strasbourg, France: Conseil de L'Europe.

Iino, M. (2006) Norms of interaction in a Japanese homestay setting: Toward a two-way flow of linguistic and cultural resources. In M. A. DuFon & E. Churchill (Eds.), *Language learners in study abroad contexts.* Clevedon, UK: Multilingual Matters.

Iwasaki, N. (2011) Learning L2 Japanese "politeness" and "impoliteness": Young American men's dilemmas during study abroad. *Japanese Language and Literature*, 45, 67–106.

Kern, R., & Liddicoat, A., J. (2011) Introduction: from the learner to the speaker/social actor. In G. Zarate, D. Lévy, & C. Kramsch (eds.) *Handbook of multilingualism and multiculturalism* (pp. 13-14) . Paris: Éditions des archives contemporaines.

Kramsch, C. (2009) Third culture and language education. In C. Vivian & W. Li (Eds.) , *Contemporary Applied Linguistics* (Vol. 1, pp. 233–254) . London: Continuum.

Otsuji, E. & Pennycook, A. (2010) Metrolingualism: Fixity, fluidity and language in flux. *International Journal of Multilingualism*, 7 (3) , 240-254.

Siegal, M. (1994) Looking east: Learning Japanese as a second language in Japan and the interaction of race, gender and social context. PhD thesis, University of California, Berkeley.

Zarate, G. (2003) Identities and plurilingualism: Preconditions for the recognition of intercultural competence. In M. Byram (Ed.) , *Intercultural Competence* (pp. 84–117) . Council of Europe.

岩井朝乃，朴志仙，加賀美常美代，守谷智美 (2008) 「韓国『国史』教科書の日本像と韓国人学生の日本イメージ」『言語文化と日本語教育』35, 10–19.

尾辻恵美 (2011) 「メトロリンガリズムと日本語教育：言語文化の境界線と言語能力」『リテラシーズ』9, 21–30.

楠根重和 (1998) 「マス・メディアの対韓認識：マス・メディアと国際コミュニケーション：朝日新聞の対韓報道を中心として」『金沢法学』40 (1) ,101–149.

久保田竜子 (2008) 「日本文化を批判的に教える」『文化、ことば、教育—日本語／日本の教育の「基準」を超えて』明石書店 . 151-173.

コスト・ダニエル，ムーア・ダニエル，ザラト・ジュヌヴィエーヴ (2011) 「複言語複文化主義とは何か」（姫田麻利子訳）『大東文化大学紀要』40, 249–268.

呉正培 (2008) 「日本語学習者の日本人イメージにみられる特徴とその形成要因—韓国の大学における学習者と非学習者の比較—」『世界の中の日本語教育』18, 35–55.

孫長虹 (2004) 「中国人留学生の日本観」『多元文化』4, 217–230.

中川かず子，神谷順子，李俊鎬 (2006) 「韓国における日本語学習者の日本と日本文化に対する意識 (1) ：大学の日本語専攻・非専攻生に対する調査から」『北海学園大学人文論集』35, 41–69.

細川英雄 (2002) 「日本語教育におけるステレオタイプと集団類型認識」『早稲田大学日本語教育研究』1, 63–70.

見城悌治 (2007) 「現代中国における日本語専攻大学生の『日本』イメージ」『国際教育』1, 1–20.

森山新 (2011) 「グローバル時代に求められる外国語教育とは」『グローバル文化学—文化を越えた協働—』法律文化社. 179-194.

守谷智美，加賀美常美代，楊孟勲 (2011) 「台湾における日本イメージ形成：家庭環境、大衆文化及び歴史教育を焦点として」『お茶の水女子大学人文科学研究』7, 73–85.